

APCN から APCC へ

—第3回 APCN Scientific Advisory Committee の報告—*

住 明正**

今まで、APCN (APEC Climate Network) について、学会員には情報が提供されていなかったのだが、大きく動きそうなので、ここで、状況を報告したい。

1. 経過

APEC とは、Asia-Pacific Economic Cooperation の略で、アジア太平洋経済協力と訳されている。ASEAN 7 か国 (ブルネイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナム)、日本、韓国、中国、チャイニーズ・タイペイ、中国香港、メキシコ、パプアニューギニア、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカ、カナダ、ペルー、チリ、ロシアの太平洋沿岸の21の経済主体を集めた組織である (香港、台湾の問題があるので、国の集まりではなく、経済主体の集まりという定義である)。この中で、1998年10月の第17回 Mexico City での地域的な科学技術の協力に関する APEC 閣僚会議で、韓国から地域的な気候ネットワークが提案された。この提案が、1999年8月のシアトルでの第17回科学技術ワーキンググループ会合 (ISTWG=International Science and Technology Working Group) で承認され、その後、APCN-WG と APCN Steering Committee (APCN は APEC Climate Network の略) が設立され、活動を行ってきた。筆者は、2001年にソウルで開かれた第1回の Steering Committee に参加した。2002年10月の閣僚会議で、APCN 中央経費が認められ、2003年の Cheju 島での APCN シンポジウムが開催された。また、2004年の会議で、2005年の APCN シンポジウム経費が認められた。

2. APCN の活動

APCN とは、APEC メンバー、および、メンバー内の研究機関から、力学モデルによる長期予報 (3 か月予報) を集め、MME (Multi-Model Ensemble) 法 (Krishnamurti et al, 1999) により、より精度の高い季節予報を実現しようという活動である。現在、参加しているのは、カナダ気象局、中国気象局、中国科学院大気物理研究所、韓国気象庁、韓国気象研究所、気象庁、ロシア水理気象局、ロシア中央地球物理研究所、NCEP (アメリカ環境予測センター: National Centers for Environmental Prediction)、NASA (アメリカ航空宇宙局: National Aeronautics and Space Administration) と IRI (季節予測国際研究所: International Research Institute for Seasonal Prediction; NOAA により設立された研究所でアメリカのラモント・ドハティ研究所にある) である。現在、これらの予報は、韓国気象庁に集められ処理されている。また、広く成果を求めるために研究者の予算も認められ、長期の研究者が6名、短期の研究者が4名、ソウルに勤めている。なお、ホームページが、<http://www.apcn21.net/> であるので、興味を持つ人は参照してもらいたい。

3. APCN から APCC へ

このような準備段階を経て、韓国政府は、2004年9月にシンガポールで開かれた第27回科学技術ワーキンググループ会合 (ISTWG) に「APCN を APCC (APEC Climate Center) に発展させ、韓国に設置する」提案を提出し、了承された。2005年の APEC の首脳会議が、11月にプサンで行われることが決まっており、韓国としては、このときに、APCC の正式な発足を予定しているとのことである。すでに、プサン市長は、この APCC の誘致に積極的で、「土地・建物を提供する」などと申し出ていると聞いた。このため、今回の会議で

* From APCN to APCC : Report on the 3rd APCN Scientific Advisory Committee.

** Akimasa SUMI, 東京大学気候システムセンター.

© 2005年 日本気象学会

も、プサン市長主催のレセプションが開かれた。

さて、それでは、APCC とは何なのであろうか？

具体的な姿は不透明であるが、APCN が、仮想的なネットワークを思い起こさせるのに対し、APCC の方は、物理的な実体を強く持ったセンターということのようである。当然、そこには、十分な資金の手当てをしてもらおう、という韓国気象庁の意図が見える。将来的には、大きな国際的な研究組織にしたい、と、当事者は考えていると思われる。

思えば、筆者は、この間、2回この種の国際的研究センター作りに関与してきた。最初が、IRI であり、2回目は、IPRC (国際太平洋研究センター: International Pacific Research Center) である。両方とも、役人とそれと協力する研究者の組み合わせで出発した。しかしながら、計画段階の、研究者中心の夢物語の時期は良いのだが、役人の出番が増えて、具体的に資金が投入され始めると事態は大きく変質してゆくの常である。IRI の場合でも、全米から提案を求めたのであるが、最終的にどここの提案を採択するかという決定プロセスの中で、大きなしこりを残したと思われる。今回の APCN の場所の決定では、透明性が大事であるとソウル大学の Kang などが主張していたのが印象的である。何事も、はっきりとしないまま決まっていくなアジヤ的伝統の中ではさして問題にならないことかもしれないが、心しておくべきことであろう (日本の意思決定も不透明であると思われる。もっとも、どこの政府でもそれほど透明ではない。したがって、このような透明性を確保するのはジャーナリズムの仕事とされている)。韓国気象庁の場合は、主要なポストにアメリカ帰りの研究者がついており、その心配は少ないように思われるが、今後の動向は気になることである。

4. 感想

今回の APCC の設立に関して、日本は最後まで合意しなかったときく。APEC は、全会一致が原則なので、一国でも反対すれば、提案は葬られる。そこで、韓国は、「日本が賛成しなければ、ITER (国際熱核融合実験炉 International Thermonuclear Experimental Reactor) でフランスにつく」といって日本の同意を求めたそうである (韓国側の責任者の Park がその場にいたといっていた)。このこと自体は外交交渉のひとつであろうが、驚くことは、韓国政府の中で APCC が ITER と同じウエイトにあるということである。ITER

の支持を獲得しようとするために、日本政府は躍起になっているときに、ITER の支持の代わりに APCC を出してきたということは、韓国政府がいかにこのことを重要と考えているかということの証拠になる。逆に言えば、韓国政府内での韓国気象庁の存在の重さである。とにかく、政権の中核部に食い込んでいような印象を受ける。日本の気象庁が予算の獲得に苦労しているのとは大違いの印象を受ける。

もう一つは韓国気象庁が、経済が中心の APEC の枠組みの中で、安全・安心に関する経済効果がある、という趣旨で、季節予報の経済的価値を認めさせようと努力している点である。このような試みは、何度となく繰り返され失敗してきた。その理由は、季節予報が当たらないからである。今回は、マルチモデルアンサンブルという新しい手法と国際協力で、ここを乗り切ろうという意図であろうが、成功するか、否かは、興味のもてることである。

前にも述べたが、アメリカでの IRI の設立、ハワイでの IPRC の設立、日本での地球フロンティアの設立、そして、今回の APCC と、実に、同じようなコンセプトの動きが繰り返されていることに気がつく。これは、個々の研究者から見ると、状況認識はほぼ共通で、国を超えて資源を集めて、より大きな組織、研究を展開しなければ、気象学・気候学の観点から考えて現在の社会のニーズにこたえきれない、ということを示しているのであろう (あるいは、「自分達の分野にもっとお金を」ということかもしれない)。しかし、実際、現実の組織ができ、活動を開始すると、必ずしも、期待に沿ったものにはならない (お金を出したところの期待に沿えない) というのが歴史の示すところである。その理由のひとつは、実現しようとするときには、過大に成果を強調すること、また、予算や人員の制約からすべての人の希望を満たすような組織は実現できるはずもなく、必ず、不満が残るといこと、および、研究者側の計画の立案・実施過程に関する実務的な能力が不足していることにある (実現しようとするれば人間の欲望が渦巻く政治の中での処し方が求められる。研究者のわがままを聞き、行政の圧力をかわす人が必要となる)。この点では、強いリーダーシップのある Director の存在が不可欠ということで、Advisory Committee の皆の認識は一致したと思われる。今回のことで、ひとつ懸念が残る。それは、日本からの参加者があまりにも少ない、ということである。気象庁の仕事だからというわけでもなからうが、日本の大学で、

季節予報に手を出そうとしているところはほとんどない。今回の会議でも、気象庁から1名のみ参加というのは、これだけ、中国、韓国の参加者が目立つなか、日本の引いた姿勢が目立つ結果となっていると思う。

もうひとつは、国際協力を口にしながら、また、アジア重視といいながら、韓国や中国などに滞在する日本からのポスドクや visiting scientist が非常に少ないことである。もちろん、個人の研究者として、研究的にみて利益があるか、ないかで決めているのだから文句を言う筋合いではないが、欧米には出かけてゆくが、アジアには出かけていけない、というような雰囲気を感じられてしまう。アジアより日本の方が進んでいる、と思っているわけでもないだろうが、10-20年後には、東アジアの状況は大きく変わっているかもしれない。若い人たちは、長期的な視点をもってアジアのこれらの活動に目を向けていくべきことと思う。少なくとも、

欧米志向から離れてアジアにかけてみようという若い人が何人かはいてもよいように思う。もちろん、これにはリスクもある。しかし、今安全と想着いても10-20年後には何が起きるかわからないのである。ひょっとすると、将来、当たるかもしれない。最後に、やはり言葉である。人の心の襞は、外国人の英語ではなかなか理解できないと思う。中国語や韓国語をマスターしたような人が何人も出てくると、東アジアの交流はもっと容易に展開することであろう。

参 考 文 献

- Krishnamurti, T. N., C. M. Kishtawal, T. E. Laow, R. R. Bachiochi, Z. Zhang, C. E. Williford, S. Gadgil, and S. Surendran, 1999: Improved weather and seasonal climate forecasts from multimodel super-ensemble, *Science*, **285**, 1548-1550.



人間—生活環境系国際会議

International Conference on Human-Environment System (ICHES '05) のお知らせ

今年の9月に東京で開催する国際会議を計画しております。これは過去2回開催してきた国際会議の3回目に当たります。内容は人間生活と環境との関連です。具体的には生気象的な人体生理の問題、生活環境としての着衣や住空間と気候との関係、生活環境が地球環境へ及ぼす影響などです。詳しくはホームページをご高覧ください。気象そのものを対象にしている会議ではありませんが、もともと学際的な研究会である人間—生活環境系学会を幹事として、日本生気象学会、睡眠環境学会、韓国人間生活環境学会が共催する国際会議です。人間の生活環境と関連がある研究でしたら幅広く受け入れることができます。ただ今研究発表申込み受付中です。

- 名 称**：人間—生活環境系国際会議
International Conference on Human-Environment System (ICHES'05)
- 主 題**：地球環境と幸福な生活
Global Environment and Quality of Life
- 内 容**：人間の生活環境に関わる諸問題
(詳細はHP参照)
- 日 程**：2005年9月12日(月)～15日(木)
- 場 所**：文化女子大学(東京都渋谷区代々木)
- 詳 細**：<http://jhes-jp.com/iches05/>
- 申 込**：下記にメールでお問い合わせください。
- 連 絡**：琉球大学工学部 堤 純一郎
jzutsumi@tec.u-ryukyu.ac.jp